

昭和の南海地震体験談

氏名: 岸本 隆(きしもと たかし)
生年月日: 昭和4年1月3日
地震を体験した場所: 由良町・自宅寝室
当時の家族状況: 父、母、姉

本人の希望により写真は
掲載しておりません

1) 地震発生時の状況

当時17歳で、父と一緒に漁師をしていた。自宅寝室で就寝中、強い揺れを感じ、目が覚めた。自宅の中にいると危険だと言い、揺れが収まるのも待たずに家族全員が外に出た。普通に立ってられない程の大きな揺れが長い時間続いていたが、そのまま収まるのを待った。ようやく収まったので、自宅の中に入ったが「これだけ大きかったら絶対に津波来るから、とにかく早く出よ」と言われ、非難する用意をした。電気が切れているようでつかなくだったので、漁に使うバッテリーで明るくし、手早く用意をした。戦争の経験から逃げるという事に敏感であった為、持ち出す荷物の用意は常に出来ていた。枕元の着替えを持ち、華族で山の上のお寺に避難した。すぐに行動したので、地震後わずか10分で避難場所に来ることができた。他には5、6人が避難していた。

2) 津波襲来時の状況

まだ夜が明けておらず、暗い時間帯であった為様子は見えないが、避難場所で待機していたら、海の方から「ゴオーツ」という海鳴りが聞こえてきて、今までに聞いたことのない音だったので、「何の音や？」という話をしているうちに、バリバリッという物が碎けるような音がしてきた。目撃はしていないが「これは津波やな」と認識した。海の近くに住んでいるので、子供の頃から「地震があったら早く山へ逃げなさい」と母親から聞いてい為、地震＝津波の連想は知っていた。大きい波は3回程度あったと思う。夜が開け、明るくなってからも、潮の上げ下げがあったが、もう小さかった。津波の心配も無くなり、午前7時頃に家族は自宅に戻ったが、自分1人だけ親戚の安否を確認する為に出かけた。

3) 家族の行動・被害

地震後すぐに対処し、行動したので、家族全員が無事だった。安政の津波に被災し、建て替えられた家屋であり、地震＝津波という事は先祖代々から語り継がれていた事だった。落ち着いて、慌てないように、漁で使うバッテリーを利用し、自宅前の道を明るく照らした。明るくなってから自宅に戻ると、床上1.5mの所まで濡れた跡があった。しかし、そのままにしていた布団や畳は濡れていない物もあった。窓や玄関を閉めて行ったので、家財道具の流失は無かった。地震による被害は無かった。

4) 集落・周囲の被害

避難途中で引き潮に流され亡くなった人が多数いた。戦後で子供の人数が多かった母親は全員をかばいきれず、手を離してしまい亡くなった子供もいただろう。停泊していた200トンの大きな船が広い屋敷の所まで流れてきていて、紀伊防備隊の施設跡や、浜の前の家屋が壊される二次災害が起きていた。特に高台に行くまで距離のある紀伊防備隊の施設跡に住んでいた人が犠牲となった。近所の寝たきりだった人は避難できなかった為、布団に横になったままだったが、床板、畳ごと部屋の中で浮いていて、潮が引くのを待って家族が助けに行った、ということもあった。親戚の安否確認をした後、浜に行ったが荒れた状態だった。港には船も浮いていなかった。

5) 地震・津波後の生活

浸水しなかった部屋を使い、片付けながら自宅で生活した。新年までの10日間は、畳を干したり、濡れていない物を天井裏に上げたり、近くの川まで布団を持って行き、塩出ししたりにかかった。家の整理はお正月が明けるまで続き、その後、徐々に元の生活に戻っていった。持ち船は流されたが、港と蟻島の間で浮かんでいるのを発見した。水は入っていたが、損傷は少なかった。積んでいた網やいかりは流失してしまったが、漁期ではなかったので仕事に影響はなかった。井戸にも潮が入り使用できなくなったので、高台のお寺の井戸を借りた。食料は、炊き出しや、遠縁の人が持ち寄ってくれたりして、どうにか凌ぐことができた。

6) 次の災害への備え

地区で避難場所が決まっているが、傾斜のある所なので山が崩れないか心配で、小高い場所に平地があればもっと安全なのに、等と家族で話している。持ち出し袋は常備して、すぐ避難行動ができるようにしている。